

「戦争と平和！」

第 22 回

私の戦後 75 年

池田 新八郎

沖縄戦から 75 年 コロナ禍の中の慰霊

6 月 23 日、約 20 万人もの命を奪った太平洋戦争末期の沖縄戦からもう 75 年が経過、今年もまた「沖縄慰霊の日」を迎えた。しかも今年はコロナウイルスの影響で追悼行事は中止、追悼式は開かれたが規模を縮小して昨年 5100 人の参列があった参加者も約 160 人であったという。戦争の記憶が薄れていく中で、沖縄には現在も日本の基地の約 70%が集中しており、辺野古基地の移転工事が沖縄県民の意思を無視して進められている。沖縄の基地の在り方と県民の心情を、日本国民全体で考えてみるべきではないだろうか。

また、この歳月を経ても日本は、国内のみならず中国、韓国から真の意味の謝罪がないと言いつけられている。戦争の禍根は重く、中国、朝鮮半島、ロシアとの関係も何か問題があれば戦争責任を問われ、同盟国であり、政権が頼りとするアメリカのトランプ大統領からも、基地の在日駐留軍の経費負担金、年間 80 億ドル（約 8500 億円）の支払いを迫られている。今後の日本の舵取りはどうすればいいのだろうか。戦後 75 年、日本は十分反省し、平和に向けての活動も進めていると思う。自立し、日本国民が求めている本物の独立した日本の平和国家像を考えてもいい時期に来ているのではなかろうか。

父の戦死と「ビルマの堅琴」との出会い

私自身も先月（5 月）78 歳の誕生日を迎え、残された幾ばくかの余生を、どのように生きていくのか想いを馳せる年齢となった。私事であるが、戦争については辛い思い出がある。この年を迎え、「見えない戦争」と言われるコロナ騒動によって、自分自身について少し考える時間ができた。

まず戦争についてだが、私は少年時代に読み、映画にもなった竹山道雄作、安井昌二主演の「ビルマの堅琴」が忘れられず、戦争といえばビルマの堅琴、そして兵士が家族を思い、よくロザンでいたという「埴生の宿」を思い出す。何故かと言えば、私の父は終戦間近の昭和 20 年 3 月 10 日、悲惨なビルマ戦線のとある川で命を落したと母より聞かされていたからです。

ストーリーは皆さんよくお分かりの事と思いますが、敗戦が決まった日本軍はイギリス軍の捕虜となり、収容所生活を送っていた。そして日本へ帰れるということが決まった数日前に小説のハイライトシーン「おーい ミズシマ 日本に 一緒に帰ろう！」という主人公の水島の肩にいたインコが叫ぶ場面がある。しかし水島はもう 1 匹のインコに「ああ 自分はやっぱり 帰るわけにはいかない」と言わせます。最後まで抗戦していった日本軍人の意地と、この戦争の意味が正しい戦争であったのかどうか水島は疑問を感じたのであろう。水島はビルマに残り、僧侶となってビルマの堅琴を肩に、白骨街道と呼ばれるごろごろ転がっていたという日本兵士の死体を処理、供養し、「埴生の宿」を弾きながら、祈りを捧げることに自分の人生をかけたのである。こういう兵士の犠牲のもとに、今日の日本の発展と平和があることを忘れてはならないと思う。

終戦時私は 3 歳で戦争の記憶はまったく皆無、母は当時住んでいた京都を引き上げ、私と弟を連れ実家の鳥取に帰り、高校を終えるまで鳥取で過ごすことになる。終戦時の貧しい配給生活を微かに覚えている程度である。戦後の復興期、高度成長期、バブル期、私の成長期でもあります。数々の点で母と対立しました。早く自立してほしいと願う母と私自身の夢でよくもめました。母は高校進学を工業高校か商業高校をすすめました。また大学と就職も東京ではなく地元か関西へ、しかも郷里に帰り役所に勤めるか、教師になることを望んでいました。私が早く就職し、親子で、鳥取の田舎で静かに平和に生きることを願っていたのであろう。

戦後を生きた母の最期

最後になりましたが、私は母 78 歳の時、認知症がかった母を田舎から所沢に呼び寄せ、92 歳の死まで 14 年間看取りました。郷里での温和な生活を夢見ていた母の期待に反し、自分の夢を追い求めていた不孝息子の最後の親孝行だったのだが……。これが私のささやかな「戦争と平和」への心情である。